

「形 tone」は広く現代社会の要求に応える美術教育の理論と実践の紹介を目的として一九五六年に創刊されました。以来六〇年を超える長きにわたって、美術教育に寄り添って刊行を続けています。「形 tone」という書名は造形と人間形成をシンボライズしたものです。子どもたちのための美術教育に取り組んでおられる先生方、美術や造形にかかわるすべての方々、そして保護者の皆様のために、これからも、よりよい美術教育を目指す道標となる内容を目指していきます。



Index No.316

③ 特集 造形的な見方・考え方って何だろう？

- レッスン① 学習指導要領解説を読もう
 レッスン② 身の回りを“形”と“色”で見よう
 レッスン③ いろいろな人の見方・考え方を知ろう
 レッスン④ インタビュー 鈴木康広

⑨ ABC PICK UP

阿部宏行

⑫ 子どもの見方

| 第1回 | 子どもの感覚とシンクロする 奥村高明

⑭ 学びのフロンティア (小学校)

えのぐ LABO 橋田朋憲

⑯ 学びのフロンティア (中学校)

自分を探して～形・色彩・素材との対話～ 佐藤直人

⑳ 村上センセイが行く! 全国美術室探訪

| 第4回 | 南砺市立福野中学校 藪 陽介

㉓ 場の設定

| こんな授業を試みた 2 | 長澤博昭

㉔ ミュージアム・エデュケーションのトピラ

富山県美術館 瀧川織恵

㉕ そぞろみ部

| 第8回 | 図書館 文：市川寛也 イラスト：今井未知

㉖ ラフスケッチ

| 第6回 | 東京都立本所高等学校 海老沼美琴さん

㉗ インタビュー

大内 進

㉘ まず見る

| 第19回 | 「ない」を見る 成相 肇

㉙ 「中美(チュービ)」

中学校美術の先生応援サイト開設

㉚ 創造のつばさを広げて

こども美術館 スカイミュージアムの取り組み紹介

㉛ 生徒作品解説 私の見方

鷹野 晃



「とげとげなのに円く見えるの面白い！」

「歯車の形と似ているね」

「貝の模様の色がきれいだな」

「形と形がくっついて、円くなっているのもあるよ」

「円でできた宇宙みたいだ！」

身近なものを集めるだけで、楽しい時間が始まりそうです。

「造形的な見方・考え方」を働かせると、身の回りの見え方が変わっていきます。

あなたの回りには、どんな形や色がありますか。

表紙の写真より
 好きな形や色
 なあに？

アートディレクション：清水 一(東京矢印)

編集・ディレクション：山本武義(東京矢印)

デザイン：東京矢印

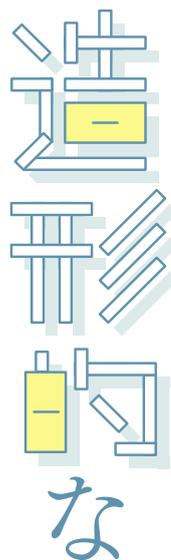
表紙写真：市来朋久

表紙タイトル：青木俊輔

表紙スタイリング：青柳由嘉

ページ下部に、それぞれのコーナーと校種の関連性の強さを表示しています。各企画は小・中・高全ての校種に関連がありますが、特に関連の強い校種を大きくしています。

例： | 小 | 中 | 高 | 特に小学校に関連の強いコーナーを表します。



って何だろう？



新学習指導要領で示された
「造形的な見方・考え方」。

教科を学ぶ根幹と言われていますが
他の教科の「見方・考え方」とは何が違うのでしょうか。
そもそもどういう「見方・考え方」なのでしょう。
今回は、みんなで「造形的な見方・考え方」について
考えてみませんか。

レッスン ①

学習指導要領解説を読もう

造形的な 見方・考え方

感性 や **想像力** を働かせ、

対象や事象 を、形や色などの **造形的な視点** で捉え、

自分のイメージ をもちながら **意味や価値をつくりだす** こと。

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編 p.11より

| | | | | | |
|--|--|---|--|--|--|
| <p>感性</p> <p>様々な対象や事象を心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性を育む重要なもの</p> | <p>想像力</p> <p>思いを膨らませたり想像の世界を楽しんだりする力</p> | <p>対象や事象</p> <p>材料や作品、出来事など</p> | <p>造形的な視点</p> <p>「形や色など」といった図画工作科・美術ならではの視点</p> | <p>自分のイメージ</p> <p>心の中に像をつくりだしたり、全体的な感じ、情景や姿を思い浮かべたりすること</p> | <p>意味や価値をつくりだす</p> <p>自分と対象や事象との関わりを深め、自分にとっての意味や価値をつくりだすこと</p> |
| <p>これらを働かせながら 対象や事象を見ることが大切</p> | <p>造形的な視点が、教科で育成する資質・ 能力を支えることになる</p> | <p>活動や作品をつくりだすことは、 自分自身をもつくりだしている</p> | | | |

※新学習指導要領では、資質・能力を育成するにあたって各教科の特質に応じて「見方・考え方」が示されています。これは各教科を学ぶ際の軸となるものです。新学習指導要領はこちらからご覧いただけます。 www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm

感性や想像力を使って、いろいろなものを見ればいいのか……。よく分からないけど試してみようか。



図工が大好き
スガ コウサク先生(採用3年目、ただ今勉強中)と一緒に考えよう!!

って何だろう？

私たちのまわりにある風景。

見慣れた光景からは、

何かを発見することは

難しいかもしれません。

そこで

「造形的な見方・考え方」を

働かせて見てみましょう。

一体どんなものが

見付かるでしょうか。

“形”と“色”で見てみよう



家がかっちに
向かって
来ているみたい。

いろいろな緑色が
見えるけど
この辺りの濃い色が
好きだな。

ウインク
しているように
見えるよ。

巨人の横顔
みたいだ。

左の写真と
なんか似てるなあ。

※見付けたものを書いてみましょう。

屋根って
いろいろな形が
あるんだなあ。

※見付けたものを書いてみましょう。



レッスン ①

身の回りを

水の中に
たくさん線が
見えるね。

この場所の雰囲気
好きだな。
何だろう。

親ペンギンが
子どもを乗せて
泳いでいるみたいだ。

四角が並んでいるの、
なんかおもしろいな。
気になる……。

空の青色と
水の青色って
違うんだなあ。

雲が水に浮かぶ
島みたいに見えるよ。



教科書の表現活動に見る 造形的な見方・考え方

いろいろな材料の形や色、触った感じなどから思い付いたことを表す「ざいりょうから ひらめき」(平成27年(2015年)度版「ずがこうさく1・2下」p.14・15)や、身近な場所の形や色、場所の雰囲気といった特徴を基に、空間の様子を変えていく「あんなところで こんなところで」(同「図画工作5・6上」p.18・19)のように造形的な見方・考え方を働かせながら身近なものに触れることが、発想やイメージのきっかけとな

る題材があります。

また、「わすれられないあの時」(同「図画工作3・4下」p.24・25)のような生活経験を表す題材では、いいなと思ったことを、自分なりの形や色で表すことが、その子の意味や価値となります。

※見つけたものを書いてみましょう。

平成27年(2015年)度版「ずがこうさく1・2下」p.14掲載



って何だろう？

同じものを見たとき

違う分野の人たちは

その形や色から

どのようなことを感じ、

考えるのでしょうか。

違う時代、

違う場所を生きる人は

何を思うのでしょうか。

人の見方・考え方を知ろう

乾いたでんしんばしらの列が
せはしく遷つてゐるらしい
きしやは銀河系の
玲瓏レンズ
大きな水素のりんごのなかを
かけてゐる

宮沢賢治『青森挽歌』より

りんごひとつでパリを驚かせたい

ポール・セザンヌ

朝のりんごは金、昼は銀、夜は銅

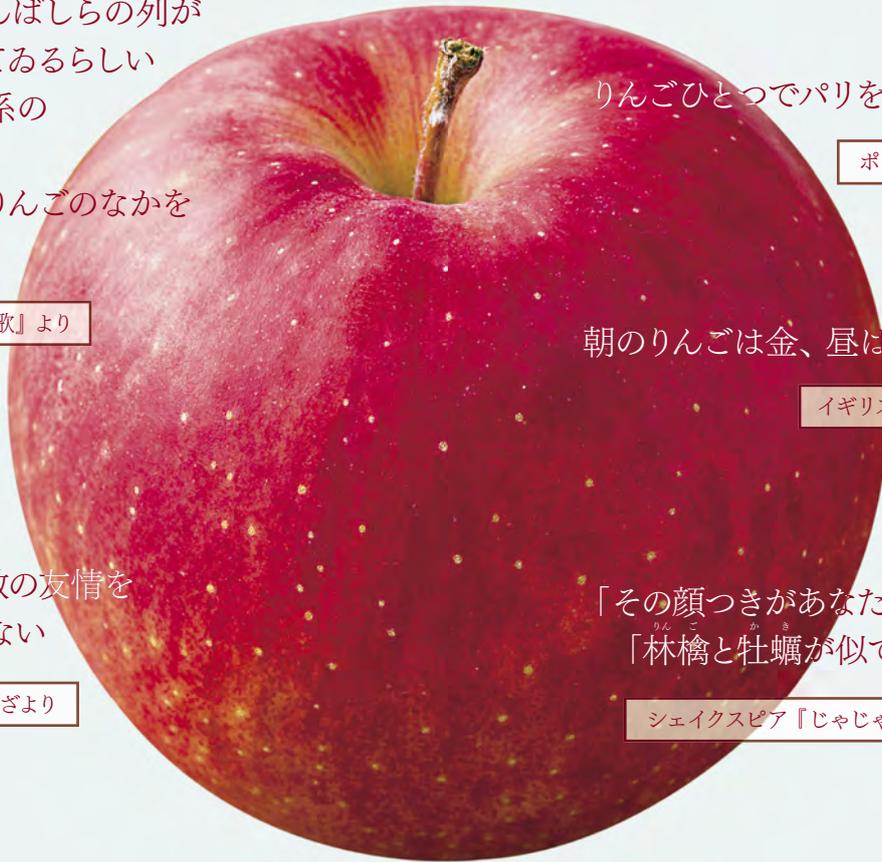
イギリスのことわざより

赤いりんごと敵の友情を
信じてはいけない

フィリピンのことわざより

「その顔つきがあなたにそっくり。」
「林檎と牡蠣が似ていればな。」

シェイクスピア『じゃじゃ馬ならし』より



渡邊 学
Manabu Watanabe

岩手大学 農学部 附属寒冷フィールドサイエンス
教育研究センター 助教。りんごとブルーベリー
の栽培方法を改善するために、樹や果実の発育のし
くみを研究している。



三木 健
Ken Miki

学びをデザインするプロジェクト「APPLE」を展開し
国内外の美術館・ギャラリーを巡回。それを背景にも
つポスターで第18回亀倉雄策賞を受賞。書籍
「APPLE」が英・中・日の3か国語で出版。

名前を付ける 名前を消す

赤いりんごの皮を細かく切り矩形に並べる。
それを複写。

その写真で直方体の箱を四つつくる。

それぞれにAPPLE、ROSE、REDと
文字を書く。

残りには文字を入れない。

すると、りんごジュース、バラの香水、
赤い何かの箱に見える。

りんごは、「バラ科りんご属落葉高木樹」。

名前を付けると中身が明快になる。

名前は、理念の声。

困った時は名前を付ける。

方位磁石のように方向が示される。

一方、観念に縛られたら名前を消す。

形と色が理解の入り口

りんごの品種名を判断するために、
果皮の色を確認する。

赤色か、黄色か、緑色か。

同じ赤でも鮮やかな赤色か、
くすんだ赤色か、

しま模様があるか、べた塗りした感じか。

また、商品性の高い果実であるか

どうかを判断するために、

形がゆがんでいないか、

全体がきれいに赤く着色しているか、

傷がないか、

病気や害虫の被害を受けていないか、

を確認する。



レッスン②

いろいろな

昨夜の夢は おもしろい
月の世界へ 行ったらば
ねじ鉢巻の 白兎
餅をぺったんこ
舂いて居た

「兎の餅舂」(『幼年唱歌』)より

此の世をば 我が世とぞ思ふ 望月の
かけたることも 無しと思へば

藤原道長

朧月大河をのぼる御舟哉

与謝蕪村

まつくろけの猫が二疋、
なやましいよるの家根のうへで、
ぴんとたてた尻尾のさきから、
糸のやうなみかづきがかすんでゐる。

萩原朔太郎「猫」(『月に吠える』)より

花間 一壺の酒
独り酌みて相い親しむ無し
杯を挙げて明月を邀え
影に対して三人と成る

李白「月下獨酌(月のもとで独り酒を酌む)」より



池田 学
Manabu Ikeda

1973年、佐賀県多久市生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了。大学の卒業制作にて紙に丸ペンを使用した独自の細密技法を確立。圧倒的な細密さと共に、ユニークな感性と創造力溢れる作風で国内外を問わず高い評価を得ている。

撮影：高橋宗正



平松 正顕
Masaaki Hiramatsu

国立天文台助教。1980年、岡山県生まれ。東京大学大学院理学系研究科天文学専攻博士課程修了、博士(理学)。星の誕生メカニズムの研究と、電波天文学の広報活動を行っている。

こんぺいとうの月を想う
月を立体として意識して見ると
いろいろな想像が膨らみます。
その大きさや空間の広さによって
随分印象が変わって見えますが、
りんごも月も原理はほぼ同じです。
光に照らされた部分の図形から
月の形状を認識するわけですが、
もし月が球体ではなく立方体や多面体、
こんぺいとうや
細長い棒みたいな形状だったとしたら、
夜空に現れる形は
どんな風に見えるでしょうか。
かなりバラエティに富んだ
夜空になるでしょうね。

世界をつかむ観測と考察
月が日ごとに形を変える様子。
月食中の月が刻々と形を変えていく様子。
人は、月の形の変化に気付き、
記録にとどめ、
その理由を知ろうとしてきました。
およそ三〇日、
つまり一カ月周期で満ち欠けするのは、
月が地球を回っているから。
月食の欠けざわが常に円弧なのは、
地球が球体だから。
時に直感に反することがあったとしても、
観測結果と理詰めの考察を組み合わせ、
人類はこの世界の姿形を
読み解いてきたのです。



同じものを見ているようでも、感じることやイメージすることは違うんだね。
科学的なことにも形や色が関わっているのは面白いなあ。
「造形的な見方・考え方」っていろいろなことの本根なのかもしれない!!

って何だろう？

レッスン ③

造形的な見方・考え方のある
人生を思い浮かべよう

「造形的な見方・考え方」は、いったい何の役に立つのでしょうか？

実際に「造形的な見方・考え方」で

創作活動を行うアーティストの鈴木康広さんに話を聞きました。

言葉では伝えきれないコミュニケーションを

可能にする「造形」の力とは？



鈴木 康広

Yasuhiro Suzuki

東京大学先端科学技術研究センター客員研究員。
1979年、静岡県浜松市生まれ。東京造形大学デザイン学科卒業。日常生活の中の見慣れたものや現象を独自の視点で捉え直しながら、誰ももがもつ原体験に共鳴するような作品を制作し続ける。

言葉でなく、形や色でしか
伝えられないもの

小学生の頃から、文章を読んで
も人と話しても、本当に相手の
ことが理解できているのだろうか
と、いつも不安でいっぱいでした。
もちろん言葉自体の意味は分か
ります。でも、言葉では表現でき
ないものに「本当のこと」があるよ
うに感じていて、それをきちんと
知りたかったんです。

だから、僕にとって「言葉」は決
して万能なコミュニケーションツ
ールではありませんでした。自分
が感動したことや感じたことを正
確に伝えるにはどうしたらいいの
だろうか。その苦しみの中から、絵
を描くという「造形的な言語」が
必然的に選ばれました。



そこで始めたのがパラパラ漫画
でした。「僕はこれを面白いと思っ
ているんだけど、君はどう？」と
パラパラ漫画を見せることが自己
紹介の代わりとなり、相手と同じ
感覚をもっているかを確かめるこ
とができたのです。コミュニケー
ションとしてはとてもシンプルな

ものですが、言葉では伝えられな
い「本当のこと」がずっと伝わる
ツールなのです。

僕の現在のアーティスト活動は
パラパラ漫画の延長にあるとも言
えます。アーティストは、世界に対
する疑問や感動を、言葉ではなく
造形で伝える人たちのことを言
います。僕は作品を通じて、世界中
のいろいろな人と対話をしている
のです。

これからの社会は、インターネ
ットを通じてますます世界中のコ
ミュニケーションが活発になっ
ていきます。便利になる一方で、多様
な人種や民族間における言葉の伝
達性の限界もまた、強く意識され
ていくでしょう。そうした時代
の中で、造形的なものの方・考
え方は必ず大きな力をもつのだと
信じています。



2014年に金沢21世紀美術館で開催された企画展
『鈴木康広「見立て」の実験室』で展示された作品。
鈴木さんがどのように身の回りの事象を見ているのか、
イラストで描かれている。

撮影：木奥恵三
画像提供：金沢21世紀美術館



「造形的な見方・考え方」を生かして、
いろいろな人とつながりたいな。
素敵な未来をつくりだそうだね！



「知っている」だけでなく
形や色など
造形的な視点で捉える

形や色など
(小学生) いろいろある
気付く
(中学生) 感じ
自分の感覚や行為を通して分かる
(小学生) 造形的な特徴
理解する
更新される
生かすことのできる知識

強そうないメージ...
さわやかに
やさしい感じが...
形や色の活用できる知識

形や色に囲まれて生きている
すてきな形だね
いい色!
生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力

(「新・図工のABC」p.13より)

ABC PICK UP

子どもの思いに身を重ね、先生に寄り添う「ABC」。
子どもや図画工作について
4コマ漫画で楽しく学べる同シリーズより、
今回は「新・図工のABC」から紹介します。

※このコーナーは、著者が選んだ4コマ漫画に、新たに書き起こした文章を掲載しています。

造形的な視点を持ち、生活を豊かにする

図画工作の「知識」は、教科の目標(1)に「対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解すること」と示されています。ここで言う「知識」とは、形や色の名前を覚えるような知識でなく、「自分の感覚や行為を通して」理解し、更新されていく知識のことを指しています。

子どもたちは、「この色は遠くからでもよく目立つ!」「この形はやさしい感じがする」などと実感しながら、形や色の概念を形成しています。そして、その概念は成長に伴う経験によって更新され、新たな形や色の概念となっていきます。こうして習得した図画工作の知識が、「場の雰囲気や自分に合った色の服を選ぶ」「日本独特の形や色合いを感じ取る」など、生活の中で生かされるとともに、社会の中の形や色と豊かに関わることを可能にするのです。

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編 第4章2(3) 参照

ABCシリーズのラインナップ



ABCシリーズは公式 Web サイトで全編をお読みいただけます。
また、冊子をお送りすることもできます。

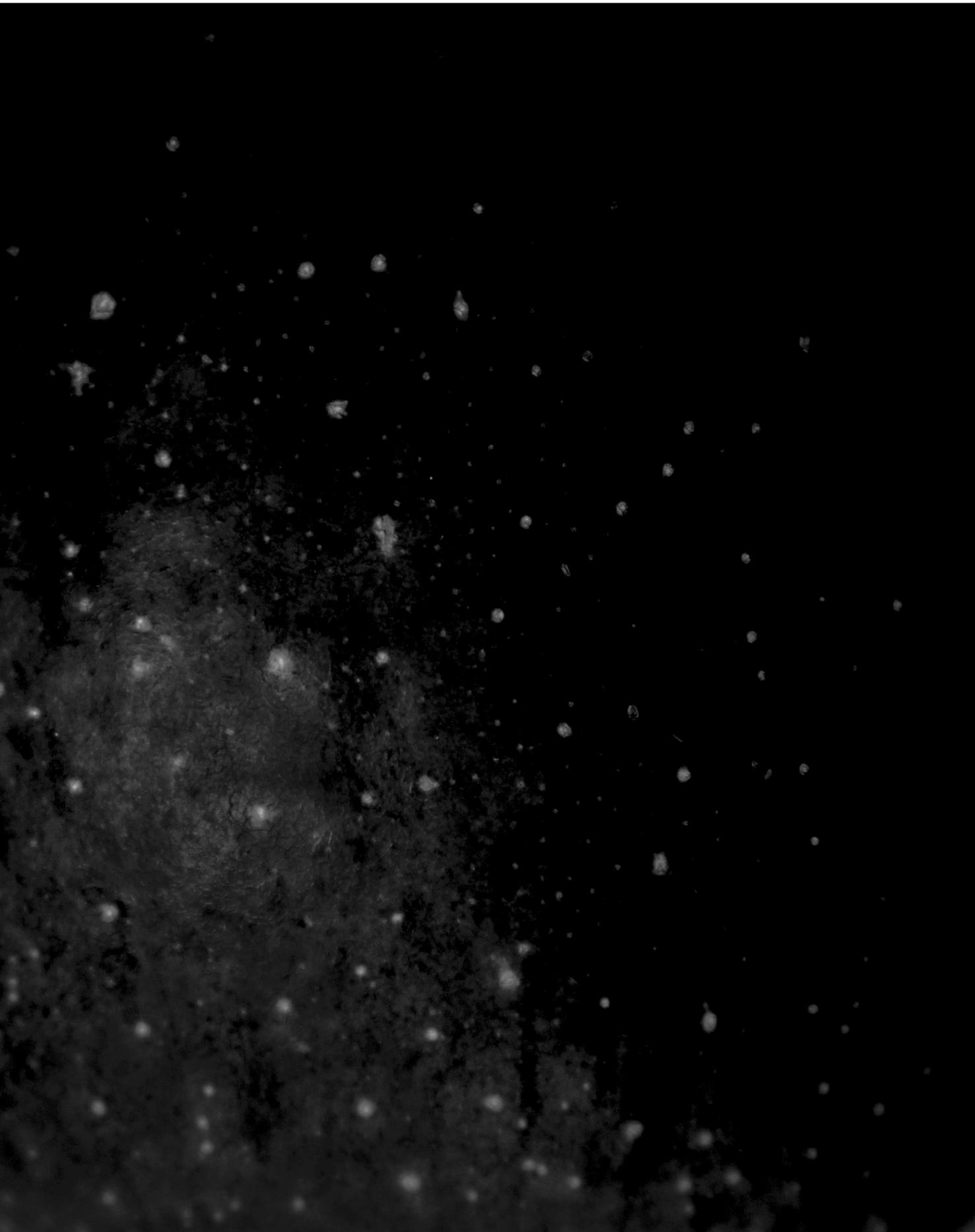


著者紹介
あべひろゆき
阿部宏行

1954年生まれ。北海道教育大学岩見沢校教授。中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会 幼児教育部会委員、同 芸術ワーキンググループ委員(平成29年)、文部科学省「学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者主査(小学校図画工作)」(平成29年)などを歴任。



面白いという実感を重ねるうちに、
形や色を生活に生かせるようになるんだね。





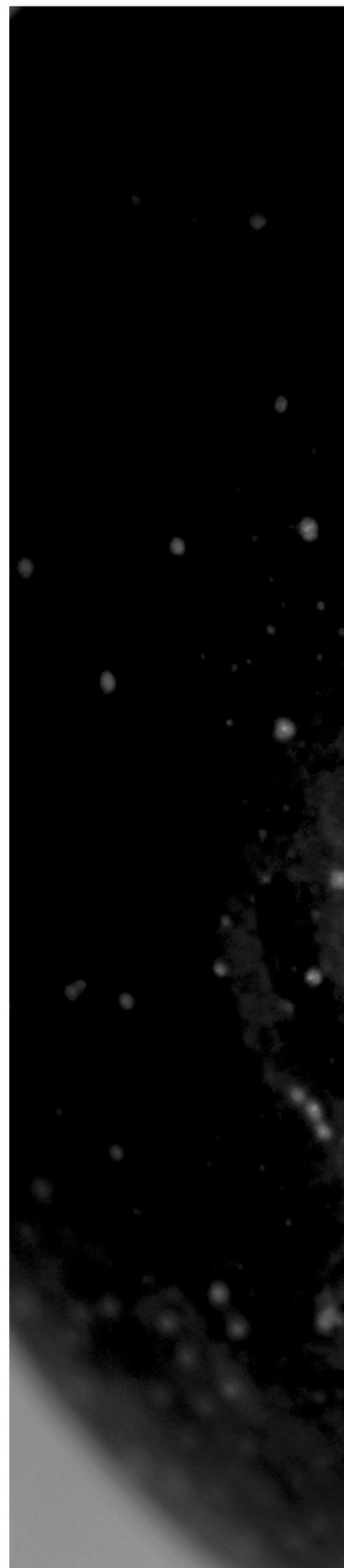
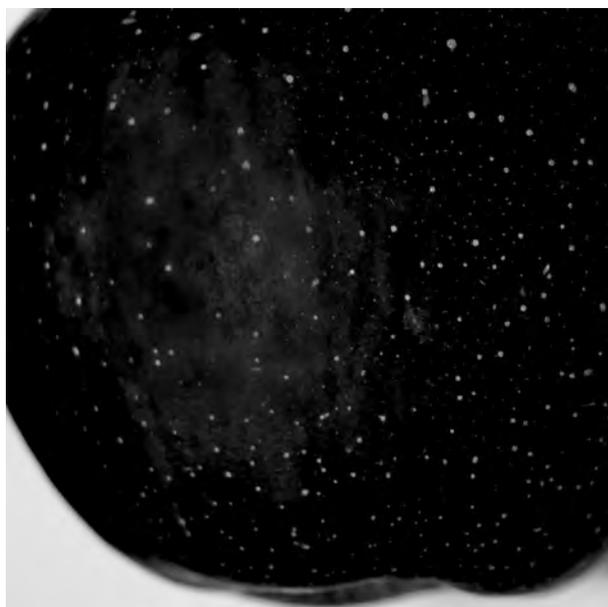
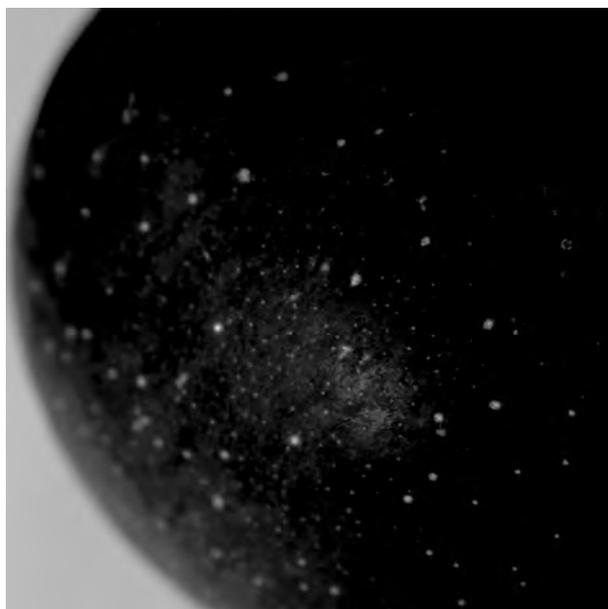
りんごの天体観測

写真
・
サイズ可変
・
2014

すずき かつひろ
鈴木康広
静岡県
1979～

写真の中に、何が見えるかな？
暗い空間に点在する、白い光と淡いもやもや。
写真の端に目を凝らせば、不思議な曲線が。
これは、なーんだ？

詳しい解説は
こちらから▼



目の前の子どもの姿から
 「その子が達成していること」「発揮している資質・能力」を捉えましょう。
 基本は「転心の術*1」。
 目の前の子どもに、自分自身を投げ込みます。

奥村先生の
 子どもの
 見方の
 #1



子どもの感覚とシンクロする

「転心の術」で最も大事なのは
 「子どもとシンクロする」こと、
 「今、子どもが感じている感覚」を感じる事です。

このような場面に立ち会ったとき、何を感じられるでしょう。



本誌p.14・15 学びのフロンティア(小学校)「えのくLABO」の活動より



- 左手で筆を支えつつ、右手の指先で筆を回す微妙な力加減
 - 中心がずれないように、まばたきせず見つめる視線
 - 軽く押さえつけた筆が回り、同時に生まれる緑色の円
 - 自分の試みがうまくいって、自然にほころぶ口元
- ◀
- そこまで感じられた時に、筆の軸と一体化し、緑色の円を生み出すこの子の集中力が分かります。そして、動きのある画面に幾何学形をつくりだそうとする構想の能力に気がきます。

子どもたちの感じていることを受け止めるには、僕たちも造形的な見方・考え方を働かせて同じものを見つめないといけない。





このような場面に立ち会ったとき、何を感じられるでしょう。



平成27年(2015年)度版 小学校図画工作科教科書5・6上 p.14掲載



そこまで感じられた時に、服が汚れることも忘れて、大きな画面と格闘するこの子の夢中さが分かります。そして、色の変化を捉える「知識」と、形の面白さを感じながら描く「技能」が発揮されていることに気がきます。

- 左の手のひらで自分の体を支える力
- 右手のコンテから伝わる、画用紙とのこすれ感や音
- 視線が捉えている色や形
- 息を詰めて描く口元
- 右腕の肌で感じるコンテの粉のざらつき

ま と め



我が身を子どもの外において、子どもの作品や活動だけを見る先生は、なかなか大人の価値観から離脱できません。でも、自分自身の感覚を、目の前の子どもの感覚と重ねることができる先生は、子どもの思いや発揮している資質・能力に届くことができます。

そのような先生から生まれる言葉は、「頑張っているね」「上手な円ができたね」という「上から目線」ではなく、「どう？ 調子は」「お、うまくいった？」でしょう。もし、子どもが笑顔で返してくれれば、「今できた部分を、子どもの視点で評価する」ことの大切さが実感できると思います。

文：奥村高明

日本体育大学
児童スポーツ教育学部 教授

1958年宮崎県生まれ。小中学校教諭、美術館学芸員の後、文部科学省教科調査官として学習指導要領の作成に携わり、現職。日本文教出版 Web マガジン「学び!と美術」執筆者。

〈今号のひと言〉

「子どもが家を出ると文化が一つ減る」という言い方があります。それは確かに実感しました。ところが孫ができると、文化はまた戻ってきます。え？ それはおもちゃを買う言い訳じゃないかって……そうです。

*1：奥村高明『マナビズム「知識」は変化し、「学力」は進化する』東洋館出版社 2018 P.192-195





えのぐ LABO

絵の具を使って、様々な技や表現を研究する



小平第三小学校の橋田朋憲先生が実践する、「絵の具でゆめもよう」
(平成 27 年 (2015 年) 度版「図画工作 3・4 下」p.8・9) をアレンジした「えのぐ LABO」。
筆だけでなくローラーや網といった様々な用具を使い、
自由に絵の具表現を追求する、実験的な授業を行いました。
子どもの主体性を生かした授業、そのポイントをお聞きます。

東京都 小平市立小平第三小学校 はしだ ともりの 橋田 朋憲 先生

子どもの「考える」を促す導入

「えのぐ LABO」は小学校三年生を対象に行っている授業です。絵の具を使って様々な表現を試し、編み出して、研究結果をレポートするという内容で、全八時間で実践しました。

授業が始まったら五分程度でさつと説明を行います。この題材で大切に行っているのは、自分のしたいことを見付けて実現すること。子どもたちには、「絵の具と筆でどんなことができるか試して、好きなことをやってみてください」と伝えました。用具の使い方の説明は、簡潔に三つのみ。「絵の具チューブの色は絵の具会社の色だからね。色を混ぜて自分の好きな色をつくりだしてください」「水の量を変えると濃さが変わります。お茶くらい、ソースくらい。考えてやってみてください」「今までの筆の使い方を思い出してみようか」と、実物投影機で拡大して映しながら演示しました。子どもたちの活動時間を少しでも長く確保し、自分で試して考えることができるように、説明は手短かに、簡潔に行うことを心掛けています。

発想を共有する場づくり

説明が終わったなら、すぐさま研究へ。最初は太さや形の異なる筆を何種類か用意して、筆でできることを探求します。三・四時間目に、ローラー、歯ブラシ、ビー玉といった用具を出すことで、一気に世界が広がる解放感や面白さを感じてもらいたいと考えました。子どもたちは、様々な用具を手にとったり、眺めたりしながら使い方を考え、実際に用具を使いながら発想を広げて、自由に絵の具を混ぜたり重ねたりする研究に取り組んでいる様子でした。

私がしたことといえば、子どもの活動に対して「すごい！」「いいね」と言ったり、写真を撮ることくらい。そうすると周りの子どもたちが集まってきて、「どうやってやったの？」「これはね……。」と対話的な学びの場が生まれるんです。その対話が新しい発想へとつながっていきます。乾燥させて色を重ねることを教えた時にはドライヤーに行列ができたのですが、列の中でお互いの作品を見せ合って尋ね合う様子も見られました。

授業中に撮影した写真は各授業の最後にプロジェクトで映し出し、その場に集まらなかった子どもたちにも共有するようにしています。





指導計画

学びに向かう力、
人間性等

絵の具で表し方をいろいろ試すことを楽しみながら主体的に考えたことをつくりだし、他者との違いを認め、よさや面白さに気付く。

思考力、判断力、
表現力等

思いのままに試しながらいろいろな絵の具での表し方を思い付くとともに、できた形や色の組み合わせに名前を付けたリ、並べたりすることを考える。また、作品のよさや面白さを感じ取る。

知識
及び技能

様々な用具を使ったり、色を混ぜたりしながら、形や色の感じを捉えるとともに、試しながら表し方を工夫する。

題材の目標

- 様々な用具を試しながら、絵の具でできることを見付ける活動への興味や関心をもつ。
- 身近な材料や用具の使い方を工夫していろいろな方法で絵の具でできることを見付けることを楽しむ。
- 自分でつくった紙の特徴をつかみ、名前を付けて支持体に並べる。
- 自分や友人の活動や作品から、よさや面白さを感じ取る。

主な学習内容

学習目標
絵の具でいろいろな表し方を試しながらつくった紙を組み合わせて「研究レポート」をつくる。

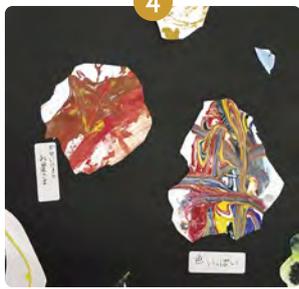
材料・用具
画用紙、絵の具、歯ブラシ、網、ローラー、ビー玉、片面波段ボール発泡スチロールなど

領域
A 表現・B 鑑賞

時間
八時間

※研究のため、新学習指導要領における三つの柱に基づく目標を設定している。

「えのぐ LABO」の研究レポートができるまで



「みんなに見てほしい、いいところを研究結果にまとめよう」と投げかける橋田先生。技の名前、イメージ、好きな色……お互いのよさや面白さを感じ取る時間が始まります。



友だちの絵の具がピシャッと飛んできて、「わあ、綺麗！」と声を上げる子も。思わぬハプニングから、素敵な発見と協創が生まれました。



手でペタペタと絵の具を塗ったり、息を吹きかけて飛ばしたり……。他にもビー玉を転がしたり、網を使ったりしながら、多彩な表現が生み出されました。



簡単な説明のあと、絵の具を使った表現に挑戦。「新しい技を見付けて」「えっ、そんなもんしか技ないの?」という先生の声掛けと挑戦に、子どもたちも奮起!

Message



図工を通して、「自分の考えたことを自分で達成できる人」「思いを遂げる人」になっただけでいいから、たいなあと考えています。ですから、極力、答えを教えず、手伝わない。支援が必要な子どもには適した支援を行うようにしていますが、基本は「解き放つ」という姿勢でいます。私が所属する東京都図工研究会教科提案部では、理想とする児童像を「おもしろいへ向かう人」として研究しています。「おもしろい」とは、よさや美しさを含む多様な価値観を

「おもしろいへ向かう人」を育てたい



指しており、これからの時代に必要な観点だと考えています。違いを拒絶せず、認めて自分の価値観に取り入れてもって面白くなる——。そんな人に育ってほしいと思っています。

授業の主役は、あくまでも子どもたち。極力自由に、制限は少なくして、好奇心を引き出し、主体的に発想を広げられるような場づくりをするよう心掛けました。

研究結果を自分の学びにする

たっぷり試した後に、研究結果をまとめる時間を設定しました。編み出した技や色、形を自由に切り出して、タイトルを付け、黒い紙にペタペタと貼り付けていくのです。偶然は、言葉にして誰かに伝えると経験になります。偶然生まれた表現にタイトルを付けることで、その経験を学びとして自分の

ものにしてほしいと考えました。「指でペタペタ」など技にフォーカスしたタイトルもあれば、「波」「蛇」などと見立てたタイトルも。中には「熱すぎる夕日まんじゅう」という面白いタイトルもありました。高学年になったとき、例えば「あのときの夕日まんじゅうみたいに描こうかな」というふうには、経験を生かしてほしいと願っています。

子どもたちの「初めて」は美しくなります。発見や感動、偶然が生み出す奇跡が詰まった、キラキラした八時間。クラス全員の可能性を感じる、充実した活動ができました。

橋田先生は東京都の研究会とは別に、
小平市図工美術研究会「codaz」を立ち上げています。
その活動についてWebでご覧いただけます。



偶然できた形と色が『熱すぎる夕日まんじゅう』って意味になるなんて！「おもしろいへ向かう」には、造形的な見方・考え方が大切だね。

自分を探して ～形・色彩・素材との対話～

自分自身と深く向き合い、その本質を表現する

宮城教育大学附属中学校の佐藤直人先生が取り組んだのは
他者との対話を通して自分自身を探していく、まるで哲学のような授業。
道徳の授業などで用いられる「子どものための哲学」(philosophy for children:p4c)の手法を
取り入れ、自分の本質に迫り、深く、熱く、刺激的な作品制作を実践しました。



宮城県 宮城教育大学附属中学校 ^{さとう なおと} 佐藤 直人 先生

対話のルールとは

今回は中学三年生を対象に、「自分と深く向き合い、表現する授業」を行いました。

最も力を入れたのが「対話」です。p4cでの「コミュニティボール」を使う手法を取り入れ、作品づくりに入る前に自分について語り合う時間を一時間ほど設けました。場の主人公である子どもたちが大きな輪をつくって座り、柔らかなボール（コミュニティボール）を受け渡ししながら対話を進めていきます。発言できるのはボールを持つ人だけです。持っている人が、その時点で話したいことがなければ他の人にパスができ、無理して話をする必要はありません。ボールを持った人が話している間、それ以外の人は黙って話を聞いていなければなりません。話が終わったらあとに対話を挟んでいきます。これを一クラス約40人の生徒たちで実践しました。



主体的に学習に取り組む態度

本気で自分を語る

簡単にルールを説明したあと、早速、対話を開始。最初は緊張してパスする生徒も多かったのですが、一人、また一人と話し出し、次第に生い立ちや悩みなど自分の内面について語る生徒が現れ始めました。他人の話をじっくり聞くことで「あの子がこんなことで悩んでいるんだ!」という驚きや、「そういういえば自分にもこんなことがあった」という気付き、「私も話していいんだ!」という安心感が生まれ、場の空気がどんどん変わっていった……。40人の生徒全員が自分について真剣に語り、また周りに問いかけるなんとも言えない空間が生まれました。

考えたことや印象に残った言葉などをメモして整理する時間を取ったあとは美術室に移動し、油粘土を使って、浮かび上がった自分のイメージを形にするステップにシフト。対話と粘土での立体スケッチの時間は必ず二時間連続にし、対話で得た生々しいイメージを熱いうちに形にするような心がけました。粘土での造形が始まったあとも、p4cで飛び出した印象的な言葉を抜き出して美術室に掲示するなどしつつ、会話のきっかけをつくるように工夫しています。

指導計画

主体的に学習に取り組む態度

「自分」を深く見つめ、それを表す方法を模索し、作品にしていく喜びを味わおうとする。

思考力、判断力、表現力等

「自分」を深く見つめ、それを表す方法を模索し、作品にしていく喜びを味わおうとする。

知識及び技能

「形・色彩・素材」を用いた表現方法を追求し、「自分」のイメージを創造的に表現することができる。

主な評価の観点

- 「造形要素」を一つのツールとして、自分のイメージを言語化・可視化し、他者に向けて発信したり、対話を通してコミュニケーションを図る。
- 造形活動を媒介として、他者と価値観や世界観を共有し、他者意識を高める。
- 「自分」を表現するための方法を、造形活動の中で探しながら、新たな価値を創造していく。

主な学習内容

学習目標

人・物・事との造形的な関わりを通して、新たな美意識・価値観を創造していく。

材料・用具

粘土、缶、瓶、ガラス、鏡、ペットボトル、木材、石、針金、ネジ、クリップ、綿、布、紙毛糸、ビニール など
（各自で必要な材料用具を準備）

領域・分野

A表現（1）A

時間

十二時間

※研究のため、新学習指導要領での想定される観点で評価を設定している。

自分を見つめ、対話し、そして作品へ！



対話を繰り返すことで生まれた作品たち。自分だけでなく他者の意見をも糧にして「自分」の表現をより深めています。※③と同じ生徒の作品



油粘土で形をつくったあと、素材選びへ。空き缶を切ったり鏡を砕いたり、自分のイメージが表現できる方法を試行錯誤する時間に。



次のステップである「色彩・素材」へのベースとして、まずはイメージが明確なうちに油粘土を使って「形」と向き合います。



生徒たちから出てきたキーワードを先生がレイアウトして掲示。これをきっかけに新たな会話が生まれ、ぐんと作品の幅が広がります。



「コミュニティボール」を使って自分について語り合います。ここでしっかり自分と向き合うことが、作品づくりのスタートとなります。

Message

生徒主体で。対話問いかけ、情報

「人生の最大の敵は自分」つくればつくほど自分を見失っていく。「自分は日本の細胞だ」「世界でいちばん自分が好き」。今回の授業を通して、こちらがドキッとするような鋭い言葉や深い考え、純粋な希望などに、驚くほどたくさん出会いました。子どもたちは可能性の塊です。思いや行動を認め、信頼して委ねることで、確実にイキイキと輝いて、表現の幅を広げていくことができます。ですから、とにかく生徒主体で。対話問いかけ、情報



「人生の最大の敵は自分」つくればつくほど自分を見失っていく。「自分は日本の細胞だ」「世界でいちばん自分が好き」。今回の授業を通して、こちらがドキッと

学校ならではの対話が、大きな刺激になる！

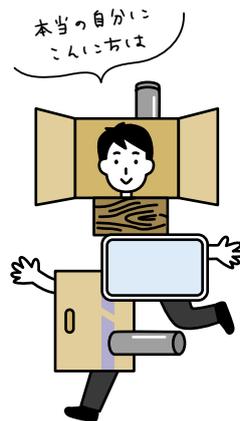


の共有などを中心に「表現したい！」という気持ちを育てるよう意識しました。中でも対話を重視しているのは、多様な生徒が集まる「学校」という場での授業だから。人とともに学び、その姿や思いに触れることで、他者理解を通して深い自己理解が得られ、さらに表現の幅が広がるのではないかと考えています。

素材を考えさらに深める

イメージを形にしたら、次は素材の検討へ。「好きな素材を集めてみよう！」と呼びかけたところ、さらびやかなモールや綿、空き缶、鏡など、様々な素材が集まりました。中には「怒って、すりきれて、くさりきった自分を、金属を焼くことで表現したい」という生徒も。この生徒は、作品をつくりながら何度もテーマとなる言葉を書き直し、最終的に「怒って、すりきれて、くさりきっても、前に進む自分」という主題にたどりつきました。その葛藤や変化を見て「これはす

思考力、判断力、表現力等



「ごい！」と感じ、何がどう変わったのかをインタビュ。動画に撮って流したところ、他のネガティブ路線だった生徒の中には「そこまで自分って悪くないよね」と、ポジティブ路線に変わるという変化もありました。形と素材を検討しながら、何度も自分と作品を見つめ直し、最後は着彩へ。「本当の自分」を探し出す、アートの本質に迫るような授業になりました。

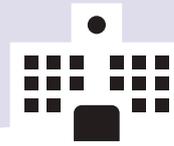


大型サイズ。最大限に使えるのは、管室と準備室がかげ。



▼生徒作品や泰西名画の複製が並ぶギャラリースペースは、ウッドベンチのある憩いの空間。

村上センセイが行く!



キンコーン
カンコーン

全国美術室探訪

隣の学校は何をしているの?

中学校美術教科書著者である
村上尚徳先生が
全国の中学校美術室を訪問。
“村上先生視点”で、現場の工夫や
先生方の美術教育への思いに迫ります。



第4回

南砺市立福野中学校 藪陽介先生

行事や美術展に合わせたポスターを掲示。
自然と目に止まる工夫で、生徒の興味を喚起。

掲示したポスターで
美術室と世界をつなげる

村上 今回美術室を訪問して印象的だったのが、独特の展示物です。廊下のギャラリースペースには数多くの生徒作品や複製名画が展示されていて、美術室には様々な美術展のポスターや資料が掲示されていました。いろいろなものを学校に掲示されているのには藪先生が考える美術教育のコンセプトがあると思うのですが。
藪 コンセプトと言うほどではありませんが、世の中にある美術作品や美術につながる要素が自然に生徒たちの目に触れる環境にしたいな、と思っています。とつきにくい美術作品も複製画という形で展示すると、生徒たちは興味をもって集まり、細かな点まで楽しそうに意見や感想を言い

合います。

三年生は京都・奈良へ修学旅行に行くので、一カ月前から東大寺の仏像のポスターも貼っています。教室のポスターで見かけた仏像の実物を、実際の東大寺で見ること、美術室と外の世界が結び付いてくれたらと思うんです。

日常的な視点や意識を
美術的な発想に結び付ける

村上 今日、見学させていただいた一年生の「配色を考える」という授業では、具体的な例としてアニメ作品や運動靴の配色などを取り上げていました。身近なものに意識を向けると、生徒たちは色に対する視点を自然と学び、生活の中の色を見直す機会になるんだなと感じました。
藪 新しい靴を買うとき、「あつ、い

い色だな」と思う。その視点や意識を、自然な形で美術と結び付けてあげたいんです。一年生には難しい題材かな、とは思っています。

村上 一年生の段階で基礎を学ぶのは意義のあることだと思えます。自分が好きな色を配色、色相、明度、彩度などの視点で理解すれば、ぼんやりとした感覚がしっかりとした意識になり、表現したい色をつくって表すことも可能になります。そんな「色」を、単なる知識として学ぶのではなく、視点として気付き、考えられるようになる藪先生の指導は素晴らしいと思いました。

三年間の美術の学びを
卒業後の未来につなげる

村上 あの黒板の上に掲示している言葉はなんですか。

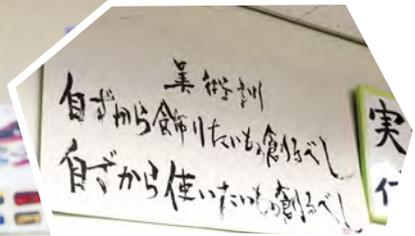


やぶ しょうすけ
藪 陽介

富山県出身。1991年より公立中学校美術教諭として勤務。2004～12年富山大学人間発達科学部附属中学校。2013年より現職。1年生から3年生の全校生徒を担当している。



▼▲生徒用の机は教室のスペースを広くとした作品併設されているお



◀指導書付録の掲示資料の中から修学旅行に合わせて仏像を貼るなど、生徒目線でタイムリーな掲示物を意識。

「自分から飾りたいもの創るべし 自分から住みたいもの創るべし」。これは私の美術科で、生徒たちへのヒントとして書にして黒板の上に掲示し、授業の題材にもその意識を取り入れています。例えば、スプーンを創作する授業では、「自分が使いたくなるスプーンをつくろう」というテーマを設けます。それがどんな形かを考えるには、自宅にあるスプーンを一つ一つ、じっくりと見るようになる。すると、世の中には様々な形、デザインのスプーンがあることに気付く、そこから自分なりの

発想が生まれると思うんです。
村上 教室の中だけの学びではなく、生活の中にある美術に気付く教育は、生徒たちが学校を卒業し、やがて社会に出てからも美術とつながりを持つ土壌になりますね。
藪 私が美術教師として意識しているのが、そこなんです。中学校で学んできた美術が、卒業した途端にぶつくと切れてしまわないように、いかにしてその後の生活とつながるかを考えています。そのため三年生の最後の授業では、「絵を描くのが苦手でも年賀状は自作したり、たまにはデパートで美術館に行ったりしよう。これからも生活の中で美術を楽しもう」と伝えていきます。
村上 美術は才能のある人のものと思われがちですが、誰もが学びを得て自分を表現できるようにするのが美術の本質ですからね。
藪 その本質に気付いてもらえるよう、段階的な学びを通じて美術の楽しさを感じてもらえるように心がけています。美術教育において一番あってはならないのは、三年間美術を学び、美術が嫌になって卒業することではないでしょうか。美術とは生涯、生活の中で楽しめる自己表現です。だからこそ、すべての生徒が楽しさを実感できるように導いていけたらと思っています。

探訪を終えて…



むら かも ひさのり
村上尚徳

岡山県出身。IPU・環太平洋大学副学長、次世代教育部教授、岡山市立中学校教諭、岡山県教育庁指導課指導主事を経て、文部科学省教科調査官、及び国立教育政策研究所教育課程調査官。2011年より現大学に。平成20年の中学校美術、高等学校芸術(美術・工芸)の学習指導要領改訂を担当。現在、日本文教出版「中学校美術」「高校生の美術」シリーズ教科書著者。

南砺市立福野中学校の美術室は、美術展ポスターと資料が整然と掲示された、シンプルな空間です。しかし、生徒たちがものの方々に気付く、見方が変わり、見方が育まれる実践とリンクした途端に、一枚のポスターが美術と生活、美術と社会のつながりを見せる「窓」となるのです。美術室のあり方は教師の個性とともに多彩であってよいはずですが、その自由な空間でいかに生徒の発想を広げ、創造力を育てる上で、掲示物はとても重要なツールとなるのではないのでしょうか。

対談の動画は
 日文チャンネルでご覧いただけます。



主体的・対話的で深い学びのための

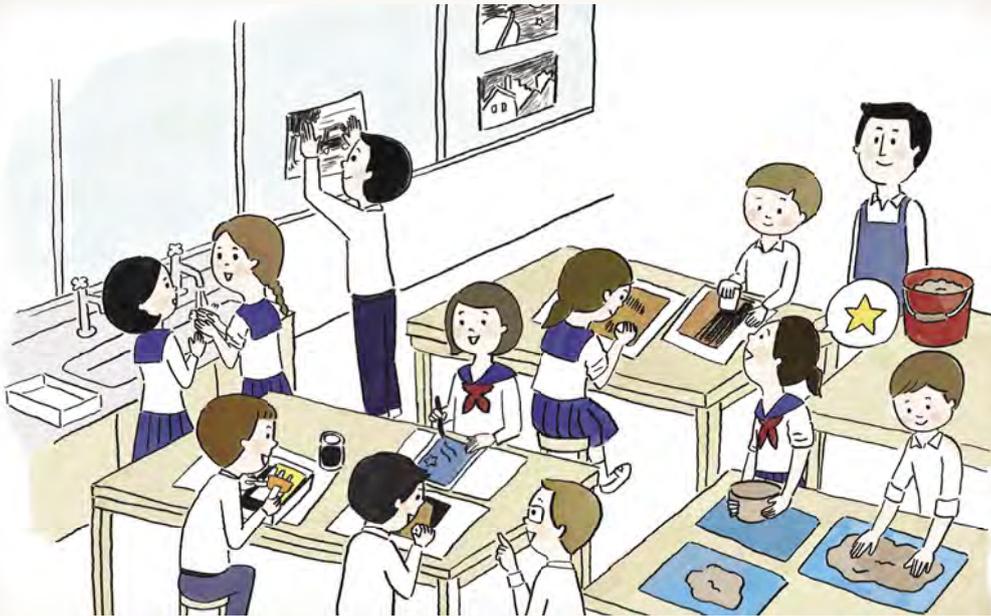
場の設定

こんな授業を試みた 2

文：長澤博昭（前横浜市立芹が谷中学校長）

イラスト：にしほりみほこ

授業を通して生徒たちに身に付けてもらいたいのは、「自分で考え、判断し、実行（表現）すること」。
この主体的な学びを実現するために、一つの冒険を試みました。
それは同時に複数題材を用意し、その組み立て、進行を生徒たち自身が考えていくというものです。



自由な試行錯誤を生む 空間づくり

2年生の3ヵ月間、銅版画と陶芸の題材を同時展開します。生徒には、それぞれの題材のねらいと完成時期を伝え、どちらから始めるかや時間配分などは、生徒自身で考えて予定表をつくります。生徒には「どちらから始めてもよいし、どちらかに、より時間をかけてもよいですが、どちらも大切にはしてください。計画は途中でどんどん変わっても大丈夫です。」と声をかけました。分野の違いに加えて、平面と立体の活動が混在するため、事前の教室環境の準備や設定は、教師の大切な役目となります。

教室の机は個人の活動場所としての座席と、活動内容別の共有スペースに分けます。銅版画のスペースは印刷用の紙を湿らせる場所に始まり、インクを詰める場所、拭き取る場所、プレス機を使って印刷をする場所、印刷したものを乾かすスペースを用意します。作品の乾燥には窓ガラスも利用。陶芸は、銅版画スペースと離れたところに、粘土バケツや成形用具置き場、乾燥棚、水回りの確保をします。

物理的環境としては手狭な感じは否めませんが、生徒が自由に試行錯誤できるように、心理的に落ち着いて活動できることを重視しました。また、活動の流れや注意点などは、先に活動した方の生徒数名に指導し、その後は生徒同士で伝授する形を採り、私は全体を見ながら活動に気を

配りました。

平面と立体、なおかつ絵や彫刻などに表現する活動とデザインや工芸に表現する活動が同時に行われることにより、生徒自身の活動が複数の視点から考えられたものになったように思います。自由な平面の発想から工芸の立体作品へのアイデアが広がったり、立体作品をつくることで平面作品に空気感が生まれたりと深まりが見られました。

また、生徒同士がコミュニケーションを取ることで、お互いの作業を邪魔しないように気を遣い、調整する場面も生まれてきました。複数の活動が同時進行することで、発想・構想のみならず、生徒の心も豊かなものになったと感じています。

富山県美術館

先生のための美術鑑賞講座

教育普及（ミュージアム・エデュケーション）とは、美術館や博物館で展示と並行して行われている、

美術や文化を主体的に学ぶことを支援するための様々なプログラムのことです。

今回は、富山県美術館の活動の一つである「先生のための美術鑑賞講座」を含め、現場の先生方に寄り添いながらプログラムを企画されている、エドゥケーターの瀧川さんにその想いを伺いました。

子どもから大人まで楽しめるワークショップを開催。

富山県美術館は二〇一七年に

「アートとデザインをつなぐ」をコンセプトの一つとして開館しました。私は、二〇一六年の秋に前身である富山県立近代美術館に赴任し、当館の教育普及のプログラムには企画から運営まで携わっています。例えば、デザイナーを講師に呼び、大切な人へ感謝の気持ちを伝えるポスターを制作する子ども向けのワークショップや、3歳の子どもたちと保護者でものをつくったり作品を鑑賞したりする企画など、子どもから大人まで幅広く楽しめる体験を提供するほか、学校との連携も積極的に行っています。企画展やコレクション展のテーマと連動したワークショップを実施し、体験を通して展示内

容を理解できるようにプログラムを心がけています。

先生のニーズをくみ取ったプログラムづくりを。

当館は小学校や中学校の教育研究会の会場になることがあり、先生たちと情報交換をする機会が比較的多いので、その中から感じる課題などをプログラムへと反映させています。学校に提供するプログラムでは、エドゥケーターから鑑賞者に向けた作品解説を求められることもあります。鑑賞者同士が対話しながら作品を見るなど、様々な鑑賞の方法も紹介していきたいと思っています。そうしたことから、今年二月に開催した『先生のための美術鑑賞講座』では対話型鑑賞を取り上げ、講師を招いてお話ししていただきましたし

た。先生方には作品の見方の広がりを感じてもらえただけでなく、「授業に取り入れてみたい」という感想もいただきました。

年一回開催予定の講座ですが、美術館で学ぶことが子どもたちにも還元されるよう、先生たちとのやり取りで培われたものをしっかりと反映させていけたらと思っています。

多面的な視点で美術鑑賞を楽しめるように。

美術鑑賞の際の問いかけのヒントとなるようなワークシートをストックしておく、学校団体が来られた時などに役に立つことがありますので、現在、小学校の先生と一緒にワークシートづくりを積極的に進めています。初めのうちは「この作品のタイトル

と作者名を書きましょう」という知識を問うものだったりしたので

が、作品にはもっと様々な見方があつことを先生と共有しながらつくっていくと多彩な問いかけのアイデアが出てきました。例えば、椅子の展示スペースでは「素材は何か」「どれが欲しいか」「この椅子を置くならどのような空間がふさわしいか」など……。問いを考えると、作品を多面的に見るようになりま

す。その問いかけを自分で考えるうちに、さらに見方が広がっていくのだと思います。また、中学校・高校からはキャリア教育の視点で美術館を紹介して欲しいという要望もありますので、美術館で働くということも含めた、美術館の『探検ツアー』も検討しています。

今後も現場の先生に寄り添いながら、学校と連携したプログラムを企画していきたいと思っています。

「先生のための美術鑑賞講座」では先生たち自身の手で、子どもに向けた美術館での鑑賞の実践ができることを目指す。



平日と週末・祝日を分けて多彩なプログラムが展開される広々としたアトリエ。



たがわ おりえ
瀧川 織恵
富山県美術館
エドゥケーター



富山県美術館
富山県富山市木場町 3-20
TEL.076-431-2711
http://tad-toyama.jp/

そぞろみ部とは・・・

いろいろな場所をそぞろ歩きながら身の回りのあれこれを、造形的に捉え直す
まったり系部活動。ここでは、部長と副部長がそれぞれの視点で切り取った
形や色を「言葉」と「イラスト」でレポートしていきます。

今回のテーマは図書館。本を読むためにつくられた空間にはどのような造形が秘められているのだろうか。2012年に海外サイトで発表された「世界で最も美しい公共図書館25」の一つにも選ばれている金沢海みらい図書館(石川県金沢市)を訪問。夏休み期間中ということもあり、子どもから大人までたくさんの利用者が読書や調べものをする中、ひっそりとそぞろみ部の活動を行った。



部長 / テキスト担当

いちかわひろ
市川寛也

東北芸術工科大学芸術学部専任講師。妖怪研究者。
各地で「妖怪探集」と称する街歩きを実践中。
主な著書に「怪異を歩く」(共著、青弓社、2016年)。

そぞろみ部

第8回
図書館

引き立てられる本

そぞろみポイント

図書館の主役は言わずもがな本とそれを読む人々である。キーキの箱をイメージしているという金沢海みらい図書館も、たくさんの丸窓から注ぎ込む光が館内を明るく照らし出す。窓辺に並べられた閲覧用の机に置かれた照明スタンドも円形で揃えられていた。夏でも涼しい快適な読書空間をつくりだすとともに、本との出会いを演出することも図書館の大切な役割だ。館内を見渡すと、書棚の隙間に置かれたペーパークラフトや手書きのポップなど、読書を促す仕組みがちりばめられている。われわれが訪れた際には「あつゝい夏には厚くゝい本」と称する特集が組まれていた。京極夏彦の『鉄鼠の檻』や万城目学の『とっぴんぱらりの風太郎』など、厚さに圧倒される書籍がずらり。内容よりも本の形態に着目したこの企画はどこことなくそぞろみ部にも通じる。もちろん、己の直観を信じて背文字ハンティングをしてみるのも面白い。今日の気になる一冊は『人間の許容限界事典』。

図書館家具ウオッチ

そぞろみポイント

図書館には他の場所ではあまり見かけない備品がある。普段は脇役に徹しているライブラリーファニチャーを用途別に分類してみた。【書架】本が並べられている棚にもさりげない工夫が凝らされている。検索性を高めるために挟み込まれたプレートや表紙がよく見えるようにつくられた透明なブックスタンド。配架前の図書が置かれたラックにも傾斜が付けられていて取り出しやすい。【踏み台】児童図書コーナーと一般図書コーナーとでは書架の高さも違う。少し高いところにある本を手にする時に重宝するのがこの道具。今回はキヤスター付きの梯子式のものや据え置き式のステップの二つのタイプを発見した。【イス】利用者の邪魔にならないように、それでいてかゆい所に手が届くように置かれている。丸い柱に沿って設えられた白いベンチ。キューブ状のストールはうまい具合に書架が背もたれになっている。一脚ずつ角が取られているのも細かな気遣い。

集まると見えてくる

そぞろみポイント

本そのものも図書館の色と形を決定づける重要な構成要素だ。全国の電話帳が収められた参考図書コーナーは赤、黄、緑、青のコンポーションが鮮やか。各家庭にも一セットぐらいつつ常備されている身近な冊子ではあるが、集合した状況を見る機会は滅多にない。また、金沢海みらい図書館の特徴でもある日本海情報コーナーを歩いていると、何となく空間全体が青い色をしていることに気付く。その要因を探っていくと、なるほど海に関する本の背表紙や背文字は青系が多いらしい。そうした眼差して改めて館内を眺めてみると、例えば農業関連の書棚は緑色、保育に関するコーナーはピンクやオレンジの暖色系になっている。これらは同じ色の本を揃えているというよりもむしろ、同じジャンルの本で分類していった結果として見えてくる景色である。こんなところから色のもつイメージについて分析してみることもまた、図書館のもう一つの使い方のかもしれない。



副部長 / イラスト担当

いまいみち
今井未知

イラストレーター。女子美術短期大学造形学科(当時)卒。
パリのアトリエ・コントルポワンにて銅版画を学び
2000年よりフリーのイラストレーターとして活動。



金沢 海みらい図書館



「育児」「手芸」の棚



「日本海」の棚



「農業」の棚



「ここで待つ」のサイン



図画工作、美術の授業で学んだことを生かすことで、どんな世界が広がり、どんな未来が描けるのでしょうか。各地で活躍する高校生にスポットを当ててご紹介する「ラフスケッチ」。今回は、東京都墨田区で美術を通して地域のボランティア活動に参加する、美術部の海老沼美琴さんにお話を伺いました。

東京都立本所高等学校
えびぬま みこと
海老沼 美琴さん

東京都立本所高等学校 美術部

日常の創作活動だけでなく、地域における多世代交流を目的に、対話型鑑賞や彫刻づくりなどを通じた様々なボランティア活動も定期的に実施しています。

http://www.honjo-h.metro.tokyo.jp/site/zen/entry_0000033.html

一つの絵でも見え方は人それぞれ。様々な世代と対話できるのが面白い。

私は絵を描くのが好きで、小学生の頃、先生に「想像力が豊かだね」と褒められてからは、ずっと自分の想像力を信じて美術に関わってきました。高校で美術部への入部を決めたのは、画材が多く、油絵もイラストも思い切り描ける環境に魅力を感じたからです。

本所高校美術部の活動の一つに、地域交流施設を利用する高齢者の方との「対話型鑑賞」があります。これは、私たち高校生がナビゲーターとなり、美術作品を提示して、施設利用者と共にグループ単位で美術鑑賞をしながら意見交換するというもので、昨年に引き続き今年も実施しました。

提示する作品は、参加者の想像力を刺激し自由な発言が引き出せるよう、過去の名画や自分の作品の中から選んでいます。誰かが言葉に詰まった際は、作品からうかがえる感情や季節感などについて、質問を交えながら対話を促していきます。予想外な意見もありますが、否定はせずに新たな視点として受け止め、他の方の意見へつなげたり、まとめていくのが進行の難しさですね。事前に部員同士で予行練習はしているものの、時間配分や話が途切れた際の対応などには反省点が残りました。それでも、最終的には皆さん笑顔いっぱい、様々な意見を出して

くださったので、昨年初めて実施した時よりは進歩できたのかな、と感じています。

今回、私は自分の作品(『戸惑い』)を持参したのですが、朝のイメージで描いた部分が夕暮れのように見えるとか、自分自身では思うような色で描けなかった部分に対して色がきれいだと言っていたりなど、思いもしない言葉や評価をたくさんいただいて心が躍る思いでした。一つの絵でも様々な見方があり、アートを通じて世代を越えた対話ができることにも改めて気付かされました。現代を生きる私たちが往年の名作に圧倒されるのも理解できる気がします。

将来はグローバルな舞台上で働きたいと思っています。その時に、言葉より絵で会話をするように、世代や国籍を越えて美術を通して人とつながっていただけるようになれたらうれしいですね。



▲対話型鑑賞で使用した作品「戸惑い」



◀「戸惑い」の解説はこちらから

国立特別支援教育総合研究所
特任研究員

大内進

レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」、
葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」――。
名画を立体的に翻案した「手でみる絵」の開発・普及を通して、
視覚に障害のある人たちの絵画鑑賞を支援する大内進さん。
”触覚による絵画鑑賞教育”の取り組みに迫ります。





手でみる絵／神奈川沖浪裏

[3Dカラープリンターによる出力・樹脂/29.2×19.3×5.2cm] 2014

「大内さんは視覚に障害のある人でも触覚を活用して絵画の鑑賞が可能な方法の研究や普及活動を精力的に行っています。まずは、視覚障害をもつ方への教育に携わった経緯を教えてください。」

私は以前、筑波大学附属の盲学校で教鞭を執っていました。大学での専攻は美術ではなく教育心理学。教員時代にも大学院で障害児教育を学び、特に視覚障害者の触覚に取り組んでいました。筑波大学附属の盲学校は、経験豊かな教員も多く、視覚障害教育に関する先進的な取り組みをしていました。この学校に勤務して、見えなければ何もできないと捉えがちな通念が大間違いであることを思い知らされました。

歩行にしても、既知の場所、例えば、学校の構内などでは、本当に視覚障害があるのかと思ってしまうほど、不自由なく動き回ることができるのです。全盲で絵を描く子どもにも出会いました。パターン化されたマンガのキャラクターなどを上手に描いていました。

健常者は「目が見えない子は、絵を理解したり描いたりすることはできない」という先入観念に捉われがちですが、私は様々な子どもとの出会いから、できないのではなく機会が与えられないことの方に問題があるのだと痛感しました。

「視覚障害の子にも美術に触れられる可能性があると感じたわけですね。」

そうですね。見える子と全く同じことをすることは困難でも、共有する世界を広げることは十分可能だと思ったのです。その後、国立特別支援教育総合研究所に移り、調査でイタリアに行く機会を得ました。その折に、ポローニャのカヴァッツァ盲人協会が運営する、視覚障害者のための美術館に出会いました。アンテロス美術館です。

ここでは、古典絵画を半立体的に翻案した、誰でも触れるレリーフ作品を展示していました。原画が有する情報の全てが反映されているわけではありませんが、描画内容について触覚を通して知ることができるのです。これなら、視覚を活用して絵画を鑑賞している人と視覚に障害のある人が感覚的に共有できる範囲が飛躍的に広がるのではないかと思います。この機会が縁となって、二〇〇五年ごろからアンテロス美術館と共同で日本の浮世絵を浮き彫りに翻案しています。それらを、私は「手でみる絵」と呼んでいるのです。

「手でみる絵」の特徴は？

描かれた遠近感を触覚で捉えるのは非常に難しいので、そこを工夫しています。例えば「モナ・リザ」**A**では、奥行を表現するため人物の部分と背景の境目の部分にオーバーハングする形で深い切り込みを入れて、層構造で表しているのです。親指とそれ以外の指でつまむ

ようにこの切り込みに触れると、人物と背景を分離して捉えることができます。

また「神奈川沖浪裏」**B**では、手前の小さな波から触り始めて、だんだん奥の大きな波に向かって触っていったらうようにしています。そうすると、奥に向かうほど手の動きも大きくなり、波の動きがダイナミックになっていくことが分かります。そして最後に大きな波頭が表れ、さらにその延長上にずっと遠方の富士山が小さく描かれている。こうしたシーンをよりドラマチックに感じてもらうことが可能となります。

「手でみる絵画」はどこで体験することができますか。

現在、私は東京都内で「手と目でみる教材ライブラリー」を運営しており、触覚を通して理解を深めることが可能な教材を所蔵し、公開しています。ここは、どなたでも見学が可能です。全国の盲学校の生徒さんが修学旅行などで見学にいらつしゃることもよくあり、「手でみる絵」に触れてもらっています。

気を付けているのは「ご自由にどうぞ」と鑑賞の全てを鑑賞者に委ねてしまわないことです。触覚だけの情報には制約があるので、足りないところを言語で補足する必要があります。作品の概要や作者について鑑賞者の既知の情報を踏まえて確認し、必要な内容を補足します。そして、触って分かったことは必

ず言葉で表現してもらいます。触覚による認知を深めるためには、能動的な姿勢が重要なのです。「分かったつもり」で終わらないように心がけています。

「手でみる絵」には健常者の鑑賞にも大きなヒントがありそうです。

視覚活用が困難な児童生徒には、絵画鑑賞の指導は難しいと思われていますが、近年、視覚に障害がある人も美術館を訪問して様々な工夫により絵画鑑賞を楽しむようになってきています。

直接、視覚に訴えて鑑賞することは難しくても、聴覚や触覚などの他の感覚を活用して、絵画にアクセスすることは可能です。適切な支援と経験の積み重ねにより、視覚による鑑賞と全く同じように理解することは難しくても、見える人と共有できる世界を広げることが可能となるのです。

こうした取り組みは、健常者にも様々な気付きを与えてくれます。視覚には恣意的な側面があつて、眼に入っているも意識されていないところが沢山あります。それに対して、触覚は欠落の少ない感覚と言われ、触ったことはほとんどすべて知覚され、触らなかつたことにすることはできません。例えば、「モナ・リザ」の背景の風景の中には川と橋が描かれていますが、多くの鑑賞者はその存在に気付かず絵を見ています。ところが、この「モナ・リザ」の「手でみる絵」

を触ってもらうと、その部分もしっかり知覚されてしまい、「これは何だろう？」ということになるのです。「これまで何度もモナ・リザを見てきたが、橋があることを初めて知った」とおっしゃる健常者の方がたくさんいらっしゃいます。

このように、絵画鑑賞においても、視覚だけでなく補助的に触覚など他の感覚を導入することで絵画の細部にまで意識を行き届かせることが可能となります。見ることに集中することが難しい子どもや絵を見ることに興味をもてない子どもたちにとっては、複数の感覚を活用することで、対象への関心を深め、集中力を高めることにつながる可能性があるのでないでしょうか。障害者の特性に合わせて対応してきたことが、実は健常者の鑑賞をより豊かにするために有効であることが理解していただけではないかと思えます。

このことは、インクルーシブ教育システムの構築を目指す上で重要な意味をもつと思います。視覚活用できない人を排除しようとする絵画鑑賞への取り組みや配慮がなされることにより、障害がある人となない人が共有できる世界が広がっていくのです。そのことを通して互いを理解しあうという意識もより深まっていけると期待されます。絵画は視覚活用できる人だけの世界という先入観にとらわれない取り組みが、実は視覚活用できる人にとっても大変有用だということが理解していただけると幸いです。

大内 進／国立特別支援教育総合研究所 特任研究員

筑波大学附属視覚特別支援学校小学部教諭を経て、国立特別支援教育総合研究所研究員に。イタリア・ボローニャのアンテロス美術館で、平面絵画を視覚障害者用に立体翻案した展示にインスパイアされ、帰国後3Dプリンターによる「手でみる絵」をイタリアの浮き彫り作家たちと共同開発。2014年、東京・高田馬場に「手と目でみる教材ライブラリー」を開設した。現・国立特別支援教育総合研究所特任研究員。

●手と目でみる教材ライブラリー

東京都新宿区西早稲田 3-14-2

(JR 高田馬場駅より徒歩12分、地下鉄副都心線西早稲田駅より徒歩7分)

※ライブラリーは予約制です。見学希望者は、大内先生 (ouchi.nise@gmail.com) までご連絡ください。

インタビュー動画は
こちらから ▶



「手でみる絵」の鑑賞法を
大内先生にご紹介いただいています。

文中に出てきた作品について



モナ・リザ

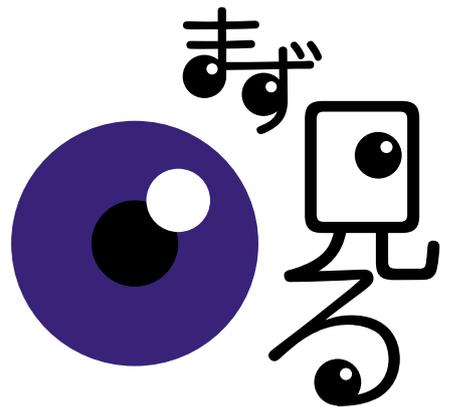
[油彩・板/77×53cm] 1503~06
レオナルド・ダ・ヴィンチ [1452~1519]



手でみる絵/モナ・リザ

[3D切削装置による出力・樹脂/
23.8×16×4.5cm] 2009

「手でみる絵/モナ・リザ」では背景と人物の境目部分が深く内側に切り込まれており、手で触った場合に人物と背景が明確に分かれていることが知覚できるように工夫されている。



第十九回

教科書でもよく見かける、おなじみの美術作品。

見た気、知った気になっても、

いつもと少し視点を変えてみると……、どうでしょう？

まず目の前に見えている要素を丁寧に拾い、

そこから読み解いていくための見方の実験を紹介しています。

ラージインテリアフォーム

[ブロンズ/高さ498cm] 1983

シカゴ美術館蔵：ヘンリー・ムーア財団より贈呈

ヘンリー・ムーア

[イギリス・1898～1986]

Reproduced by permission of The Henry Moore Foundation

「ない」を見る

穴がある、とはいいたいということでしょう。ないところがある、とは。

あるとき電車のつり革にもたれながら本を読んでいて、視野の端の方で顔面にぼっかり穴があいている人がいることに気付いてぎょっとしたことがあります。改めて見てみたら、単にそれは大口をあけて眠り込んでいる人でした。またあるときは、いつも通る場所のデジタルディスプレイ広告の一部がエラーで欠けてしまっていて、その黒く抜けた四角い穴に引き寄せられるように見入ったこともありました。

穴というのは、ときに暴力的なほどの存在感をこちらに見せつけます。いや、穴という非存在が存在を脅かすところに暴力が発生するのですね。視覚でも触覚でも、あらゆる感覚にとって、穴は対極の力そのものです。穴があるところ（穴を穴

として認識できるところ）には、必ず「ある」と「ない」という極端な関係が生じる。穴、もしくは「ない」ことに数々の美術家が多大な関心を抱いてきたのも当然のことです。

ヘンリー・ムーアは、とりわけ穴の効果を使うことが巧みであった作家です。穴に関心があつたというより、そこに生じる対比的な関係にひかれ続けていました。この作品を眺め回すだけでも、おおらかな丸みからの急速な落下、えぐられたような穴と、縫い針の糸通し部のように引き伸ばされた穴、後ろから圧迫されたように鋭角に張り出した腰の部分、等々、ある／ない、柔らかい／硬い、速い／遅い、強い／弱い、といった複数の関係が意識的に織り込まれた形になっていることが分かります。この作品はもともと、「大きな内部の形」というタイトル通りの、カプセルのような殻に守られた柔らかな人体をかたどった作

品から、内部の人体部分を独立させて派生作品でもありました。

ムーアの一連の作品を見てみると、巻き込んだりつなげたりと様々な手を使って、「穴をあける」というより「穴を閉じ込める」ことによつて、穴の力に注意を促そうとしています。仮にこの彫刻が二本足であつたなら、下部の穴は穴ではなくなります。足と台座の間があいていても、そこは「見なくてよい部分」になるはずで、単に無視されるわけです。

このように操作次第で、「ない」ところはときに穴として認識され、ときには認識されない部分として消えてしまいます。さらには見たくない部分にさえなり得るでしょう。穴は、暴力でもあるのですから。

ならば逆に、ムーアの彫刻の仕組みをかみ砕いて、次は自分で仮想の穴をつくりだすことだってできるはずです。私たちが事物として見ているものの内部や周囲には、必ず「ない」ところがあります。余白や空白と呼ばれる、目を向けられることのないその部分を「穴」だと思つて見てみる。陣地取りゲームのように、

世界を反転させてしまうのです。そういえば、「椅子の下の空間」を塊の彫刻に変えてしまったブルース・ナウマンという作家もいました。

さあ、「ない」ところを見てみましょう。目の中に、穴を、つくってみましょう。

成相 肇 なりあい・はじめ

東京ステーションギャラリー学芸員。

一九七九年生まれ。府中市美術館学芸員を経て、二〇一二年から現職。

主な企画展に「石子順造の世界」、「ディスカバー・ディスカバー・ジャパン」、「パロディ、二重の声」など。

〈今号のひと言〉

夏に行ったフィンランドで体験した白夜がとても神秘的でした。夜中になってもずっと明るいのはSFのよう。視覚的に夜が分からないので、体内の夜の感覚を探る日々でした。



東京ステーションギャラリー「展覧会情報」
「吉村芳生 超絶技巧を超えて」
(二〇一八年十一月三日)
〜二〇一九年一月二〇日

スマートフォンでも
読みやすい



中美チュービ

NEW 2018.08.11 Sat 大橋功先生★美術のチカラ 美術による学びの成長ストーリー 学びを通して育てたい生

中学校美術の先生応援サイト開設

授業・指導に役立つ記事を定期的にお届けします

収録コーナーのご紹介

サイトオリジナル

大橋功先生★美術のチカラ

～美術による学びの成長ストーリー～

中学校の美術による学びのチカラを、3年間の生徒の成長する姿に重ねて、大橋功先生と一緒に考えていく連載コラムです。

各界の方々に聞きました！つながる美術

世の中、美術じゃないけど、ほんとは美術な人だらけ。各界の人物に焦点をあて、「美術の学び」とのつながりに迫ります。美術教育の素晴らしさを、美術教育以外の視点からインタビューするコーナーです。

「形 forme」をさらに深める

中美な人

～もっと知りたい指導の工夫～

「学びのフロンティア」をWebでも展開します（中学校のみ）。紙面だけでは掲載しきれない、各先生が考える中学校での学びについて掘り下げてお話を伺います。

『村上センセイが行く！』

全国美術室探訪

隣の学校は何をしているの？ 動画版

好評連載コーナーの動画版を公開。村上先生と全国の美術の先生との対談をあますことなくお見せします。

iPhoneアプリ「中学美術先生のためのABC」をWebにも展開

指導の悩みABC

～先輩からアドバイス～

指導や授業で、つまづきがちな悩みや疑問を取り上げ、問題解決へのアドバイスを提案します。

授業づくりのABC

～題材のポイント～

表現・鑑賞の題材ごとにポイントを絞った解説を掲載します。

LINE@

はじめました



「友達募集中」

登録は、こちらのQRコードから！

普段お使いのLINEに
「中美(チュービ)」の
更新情報等をお届けします！

日文 中学美術

検索

続きは
『中美(チュービ)』で





Vol.7

島根県・安来市加納美術館連携企画
「美術の教科書展覧会」

■二〇一八年
五月二六日（水）～六月十日（日）開催

安井曾太郎や小磯良平など、美術の教科書によく出てくる画家の作品を多く集めた、安来市加納美術館の特別展「名品と出会う」。その連携企画として、展覧会で取り上げる画家の作品が掲載された、過去の中学校・高校の美術教科書を展示しました。

見開きで展示した教科書の横に、鑑賞のポイントをまとめた吹き出しを掲示。来館者がそれを参考にしながら作品を見て、「描かれた情景の季節はいつか」「その場に居たらどのような心地がするのか」など、自分の体験とリンクさせながら想像を広げていくことで、作者の心情を豊かに感じ取り、自分ごととして作品を楽しんでもらえるよう工夫しました。ここには、日常の中で美しい情景に出会った際に、自分ならどのように表現したいと感じるのかということにも思いを巡らせてもらいたいという願いも込められています。

これまで美術の教科書を見る機会の少なかった方にも、美術の教科書は知識を得るためだけのものではなく、掲載作品の鑑賞を通じて、造形的な見方や考え方を深めるきっかけを与えてくれるものだということを実感していただけたのではないだろうか。

教科書には過去から現在までの数多くの作品が取り上げられています。今後も、美術の教科書を見ることで、鑑賞を楽しむための多様な切り口を知っていただける機会を提供したいと考えています。

今後の予定

- ◎ あべのハルカス美術館
「生誕120年 イスラエル博物館所蔵 ミラクル エッシャー展」連携企画
●「教科書・パネル・素材で知るエッシャーの技法探検」(展示)
2018年11月16日(金)～2019年1月14日(月・祝)
●「ステレンボードで版画をつくろう いろいろうして」(ワークショップ)
2018年12月1日(土)・2日(日)・8日(土)・9日(日)

この他にも、鑑賞プログラムやワークショップを開催予定です。
詳しくは<http://kodomo-sky.jp>をご覧ください。▶▶▶



こども美術館 スカイミュージアム

大阪市阿倍野区阿倍野筋1-1-43
あべのハルカス27階
TEL・FAX:06-6690-0907
E-Mail:info@kodomo-sky.jp

◎ 常設展示
水～金曜日13:00～19:00、土日祝11:00～17:00、
月・火曜日休館
※月曜日が祝日の場合は、水曜日が休館となります。
※特別企画がある場合は、開館時間と休館日が変更になる場合がございます。



小・中・高を通して「図画工作・美術」の教科書をつくっているのは、日文だけ。これからも「図画工作・美術」を応援します。



小学校図画工作教科書



中学校美術教科書



高等学校美術教科書



中学3年 ミステリー～水たまりの中の世界～ [写真/サイズ可変]
平成28年(2016年)度版 中学校美術科教科書「美術2・3下」 p.15掲載

一見、墨の濃淡で描かれたかと思わせる白黒の画面。しかし右上のわずかなブルーに気付かされます。奥行きのある雲の重なり、さらに奥には光り輝く太陽。でも、何か丸い多数の点が画面をさまよひ、墨をはじいたような箇所があります。画面の左上の方で、角が三角形に切りとられたような不可思議な構図……。『あつ』。ここで大きな誤解に気付かされます。

そう、「これは写真だったんだ……」。竜が今にも出現してきそうな、あまりにも見事な雲の濃淡。題名に「ミステリー」という言葉を用いた作者の思惑にすっぴりはめられてしまいました。この壮大な空の奥行きは、実は水面に映った虚像だったのです。

静かに息を潜めて、鏡のように自らの存在を隠しきった水面。漂う泡だけが、実像としてわずかにそこに存在しています。この泡の事実は、さっきまでの雨がいかに激しかったかまでも、私たちに暗示してくれています。

水面が少しでも波打てば、この「ミステリー」は成り立ちません。作者はこの自然の「いたずら」を見事に見つけ出し、その一瞬を捉えたのですね。
あなたは、どう思いますか。

小 | 中 | 高 |

形 forme No.316-2018

日文教育資料 [図画工作・美術]

平成30年(2018年)10月22日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33411

制作：株式会社 東京矢印

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690